

## 献 辞

人文社会科学研究科教授 長 田 健

伊藤修先生は、本年（令和4年）3月に埼玉大学を退職された。埼玉大学経済学会は、伊藤修先生の長年にわたる埼玉大学へのご貢献に感謝し、ここに退職記念号論文集を刊行する。

先生は、昭和54年3月東京大学経済学部をご卒業された後、同59年6月東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻第2種博士課程<sup>①</sup>を単位取得退学された（平成7年5月に東京大学より博士（経済学）を学位授与）。その後、昭和59年7月日本学術振興会奨励研究員、同60年5月大蔵省財政金融研究所研究員、同61年4月神奈川大学経済学部専任講師、同63年4月同大学助教授、平成8年4月同大学教授を歴任された後、同11年4月に埼玉大学経済学部教授に着任された（その後、同27年4月埼玉大学大学院人文科学研究科教授に配置換）。

先生は教育上、学術上、大学運営上いずれにおいても非常に優れた功績を残された稀有な人物であり、唯一無二の教育者・研究者である。

まず教育上の功績について述べる。本学着任以降、平成26年度までは「金融論」担当教員として、平成27年度以降は「日本経済論」担当教員として、23年間にわたり学部教育、大学院教育に尽力された。学部教育では毎年多くのゼミ生を抱え、現在まで130名を超える学士を輩出、その中には優秀卒業論文を受賞する学生も複数名おり、熱心で丁寧な指導で知られた。現在、中国の大学にて活躍する蔡玉成氏（学部・大学院と指導を受け、学部・修士で優秀論文を受賞し、博士課程在籍1年で博士号を取得）もそういった学生の一人であり、国内外の多くの人材を育成した。大学院教育における功績も特筆すべきものである。本学着任直後の平成12年に東京ステーションカレッジが開校し、立地も影響し日本銀行や大手民間金融機関などから伊藤先生に「金融」研究の指導を仰ぐ多くの学生が志望・入学し、現在まで多くの修士号取得者・博士号取得者を輩出、その数は30名を超え、大学にて教鞭をとる修士生も多い。本学のリカレント教育の礎を築いた功労者の一人であると言えよう。その指導は国内にとどまらず、モンゴル中央銀行初の女性博士であるヒシュゲ・ジャルガル氏など、多くの留学生修士生も輩出した。副学長着任の依頼を受けた際に、教育者であり続けることを強く希望し、副学長の重責を担いながらも後進の育成に尽力された事実も先生の教育者としての功績の一つである。

研究上の功績については言をまたない。日本金融史の大家として知られ、現在まで30冊にも及ぶ書籍を出版し、50編にも及ぶ学術論文を公刊してきた。学部長・研究科長・副学長着任中という大学運営で多忙な時期でさえも、ほぼ毎年書籍を出版しており、常に研究者たらんとする姿は研究者の鏡といっても過言ではない。専門分野である日本金融史（20世紀～現在）を中心に蓄積された業績は、虚心に「事実」を発見し証拠・因果関係を徹底して追った実証分析が多く、ストーリーとしても面白く読みやすいものばかりである。我々が知る歴史は、誰かが作り上げた根拠の乏しい通説に過ぎない可能性が常に存在する。それを常に疑い、自身の目で事実は何だったのかと迫る研究は多くの研究に引用され研究

① 第2種課程とは東京大学大学院経済学研究科の改組によって昭和52年度に誕生した一貫制博士課程。

の発展に貢献した。特筆すべきは1995年度にエコノミスト賞（毎日新聞社主催）を受賞した『日本型金融の歴史的構造』（東京大学出版会）であろう。経済論壇における芥川賞とも評される歴史ある賞の受賞作であり、バブル崩壊後の金融危機に苦しむ日本経済が自身を見つめ直し将来を展望するための羅針盤の一つとなった大著である。流行りに流されず、虚心坦懐に研究する姿は後進の研究者に影響を与えた。学会においては、日本金融学会に所属し、長年に亘り学会誌『金融経済研究』の編集専門委員を務め、学会の発展および学術研究の促進に貢献なされた。

大学運営上の功績としては経済学部長、人文社会科学部研究科長、そして副学長（研究・産学官連携担当理事）などを歴任し、優れた大局観・リーダーシップにより研究教育環境の整備、労働環境の整備、産学官連携の促進などに尽力なされた。副学長在任中には、一連の埼玉大学創立70周年記念事業に多大なる貢献をなされ、「埼玉大学研究マップ」の発行や「東アジアSD研究領域・東アジアSD研究センター」の創設など、本学のAll in One Campusを活かした文理融合（複合科学的見地からの研究会創出）の試み、国内外への研究成果発信による産学官連携の試みなど、大学運営上の功績も枚挙にいとまがない。

埼玉大学経済学会は、ここに本論文集を伊藤修先生に捧げ、先生のご健康と今後における一層ご活躍を祈念する次第である。

最後に、蛇足ではあるが、私個人の伊藤修先生への感謝を述べさせて頂きたい。私は伊藤先生の「金融論」の後任として平成27年に着任した。第二の師匠といっても過言ではない先生との出会いは幸運の一言に尽きる。私たち文科系の研究者は大学院を修了し指導教員の元を巣立ち、大学に着任すると文字通り「独り立ち」する。一般企業のように上司はおらず、仕事を見て盗む環境は殆ど存在しない。研究者、教育者、そして大学運営に携わる者としてあるべき姿を誰も教えてくれない。しかし、先生と一緒に過ごした7年間は、唯一無二の贅沢な学びの場だった。先生と共に主催した埼玉大学金融研究会（通称：サイキン研）とその後の飲み会、そして多くの大学院生と共に指導する中で研究者・教育者としてあるべき姿を学ばせて頂いた。伊藤修先生の師である中村隆英先生からの教え「研究史の流れに乗ろうと血眼になる暇があったら生のデータ・資料を読み。資料は事前の図式・仮説を都合よく飾るために使うのではなく、そこから虚心に『事実』を発見（ファクト・ファインディング）すべきものだ。あたかも裁判での立証のように、証拠・因果関係を徹底して追え。しかしまた、そこから出てくるストーリーが面白いものでなければいけない」（『日本型金融の歴史的構造』p. iii より）は、先生の教え子だけでなく、私の中にも深く刻まれ脈々と流れている。埼玉大学着任時に、前任の伊藤先生の名を汚さないような「金融論」の研究者・教育者とならんと強く心に思ったことを覚えている。まだ山の頂ははるか先であるが、一歩ずつ先生に近づくべく精進したい。これからもご指導ご鞭撻頂ける幸運を再度頂ければ望外である。

令和4年3月吉日